

---

# ドラマチック・ホリデー

黒崎真冬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラマチック・ホリデー

### 【Nコード】

N5009F

### 【作者名】

黒崎真冬

### 【あらすじ】

帰り道で拾った1枚の紙で退屈な日常が変わった。ヒネクレ少女のとある夏の一日の話です。

少女が夕闇に染まった土手を退屈そうに歩いている。桜並木が続く河川敷の土手にいるのは彼女だけだ。少し伸びかけたアツシユグレーのショートカットに鮮やかな黄色いタンクトップと食い倒れ人形のようなオーバーオールという奇抜な着こなすと、幼い風貌にそぐわない赤いカラコンとごついシルバーアクセで彼女は常に人目をひいているが、当の本人は人の目など全く意に介していない。彼女の目に映るのは彼女の興味をひくものだけだ。彼女はこれから自分が巻き込まれる破天荒なドラマを知らない。イアホンで外界の音を遮断して帰途につく彼女は土手がいつも以上の静寂に包まれている事さえも気付いていない。

唯は見慣れた道をぼんやりと歩いていた。

今日は、夏休みの課題を片付けようと思って珍しくやる気を出して大学の図書館に向かっていたのだ。けれども、昼ご飯を食べた直後に家を出たのが悪かった。思っていた以上にきつい日差しにうんざりして、学校に着いた頃にはすっかりやる気を失っていた。勿論課題が進んでいる筈もない。

大体まだ7月なのに何でこんなに暑いのだ。いくら散歩が好きでも、日も暮れようって言う時間になっても蒸し暑さが体にまとわりついてきたら嫌になるってもんじゃない。まあね、虫除けスプレーをし忘れたのに全然虫に刺されないのだけはラッキーだけだよ。でも、そんな小さい些細なラッキーなんて慰めにもならないっての。あーあ。こんな事なら大人しく家でダラダラしとけばよかったわ。

無表情の裏でどうでもいい事を毒づきながら歩いていた唯の進路を遮るかのように一枚の紙が落ちていた。そんなもの踏みつけて歩いてもよかったけれど、急いで家に帰ったところでご飯を作ること

くらいしかやる事はない。少し興味をひかれて手にした紙には中央に文字が一行だけシンプルに自己主張をしていた。

「今宵貴女の宝物を頂きに参上します　ボンバーヘッド・マニア」

思わず感動してしまうアホらしさ。

懐かしさを感じるくらいにパクリ要素に満ちた決まり文句。

いつも冷静な唯も思わず表情が崩れたが、頭の中を検索するまでもなく該当する情報は多数ヒットした。これはこんなふざけた文章ではあるが、今最も世間を騒がせている怪盗の犯行声明文である。あまりニュースや新聞に触れない唯でも知っているくらい有名な怪盗、それがボンバーヘッドマニアだ。

一年半ほど前に突如ヨーロッパに現れたボンバーヘッドマニアは馬鹿馬鹿しくも華やかな手口ですぐに時の人となった。活動拠点がヨーロッパにもかかわらず、日本でも連日報道されている事でもその注目度の高さが分かる。現代のアルセーヌ・ルパンとも呼ばれている彼の犯行は華麗にして派手。にて、アホ。まず、服装からしてアホだ。スリーピースの黒の細身のスーツにセルフレームのメガネと何故かアフロを身に付け、胸元には必ず一輪の真紅の薔薇を忘れない。そして犯行前には「今宵貴殿の宝物を頂きに参上します」と、どこかの漫画に影響されたかのような子供じみた犯行声明文を空からセスナではら撒いては、警察と犯行先とマスコミを煽っている。声明文は文面を変えて数度に何度もばら撒かれ、その度に内容は段々具体的になっていくが、決して標的の名前が直接書かれる事はない。そのくせ、警察が謎が解けずに原場に向かえなかった場合は、わざわざ犯行現場から警察に電話をかけて、自分の逃走経路を断つ演出をしてから標的を盗んで逃げるような真似をする。また、犯行後は必ずジャンクなお菓子とアフロのツラの一部と次の標的のピン

トをおいていくようだ。

その官憲を小馬鹿にした態度と、逃走時に披露される実現が不可能だと思われる2次元の技やトリックの見事さから、市民からはリアルな娯楽として注目されていて様々な噂も飛び交っている。

かつて逃走の際にカメハメ波を出したから、今度はスタンドを背負うに違いない。彼は盗みそのものには興味がないだろう。盗んだものは闇市場で換金しては寄付をしているのがその証拠だ。いやいや、換金したお金は次の犯行に向けて技を磨くために使っているのだろう。少し思い出しただけでも無責任な噂には事欠かない。また、3ヶ月程前から、日本が犯行現場になることが多くなったため、警察庁ではつい最近ボンバーヘッドマニア対策本部が発足した。しかし、威信をかけて右往左往する警察と比べるとそこら辺の子供達は気楽なものだ。子供達の間では空前のアフロブームが起きていて、アフロのカツラが手に入りにくくなっていることがちょっとした困った事件らしいのだ。

あたしにはただのマジックを履き違えた子供じみた目立ちたがりの犯罪者にしか見えないけどさあ。大体、漫画のような突飛で愉快な出来事は3次元では起こらないんだから、そう言う事は現実には持ち込まないで欲しいわ。仮に百歩、いや一万歩譲っても私の周りでは起こりっこないんだから。でも、子供が家に閉じこもらずに外で駆け回るのはいい事かもね。近所の子供たちがボンバーヘッドマニアごっこに興じて、そのまま忘れて帰ってしまっただろう手の中の紙をポケットにくしゃっと突っ込むと唯はまた歩き始めた。結構長い時間紙に気をとられていたのだろうか？紅く染まっていた空は濃紺の面積が広がっていた。あとは川の方から多少風が吹いてくれば涼しくてちょうどいい。耳に嵌めていたイヤホンを外して川の音を聞きながら歩いていたら、今度は木の上からさっきと同じくらいの大きさの紙が降ってきた。掴めというかのような絶妙な速度でふわりと落ちてきた紙を右手で掴むとそこにはさっきよりも更に

ふざけた文句が書いてあった。

「貴殿の宝物は私の宝物。私の宝物は何でしょう。ボンバーヘッドマニア」

知るかい。唯は心の中で激しく突っ込んだ。少し右手のスナツプもきかせてしまいそうになったが、それはすんでのところで押しとどめた。そもそも唯はボンバーヘッドマニアが好きではないのだ。むしろ大嫌いだと言ってもいい。唯の目の届かぬ場所で勝手に色々やらかすのはそれでいい。でも、唯の世界に非常識が介入してくるのは何としても阻止したかった。ドラマチックは唯の世界には必要ない。ドラマは2次元だけで十分で、日々の生活は平凡に送ればそれでいい。期待しても今まで何もそんなこと起こらなかったんだから、コレだってあたしには関係のないことだ。きっとそうだ。邪魔な思考を振り払うかのように唯は早足で歩き出した。

しかし、その反発心を逆撫でするかのように木の下を通る度に唯をめがけて紙が次から次へと落ちてくる。頭上にのっかり、耳の傍をすり抜けて、目を塞いでくる紙も全て手で払いのけながら歩き続けた。それでも時に唯の視界に入ってくる紙には1枚1枚違う文章が一言ずつ綴られていた。

「私は紳士。紳士は女性を大切にするのが本懐。ボンバーヘッドマニア」

「私の宝物は女性の幸福。ボンバーヘッドマニア」

「貴女の大切な物を取り戻す。ボンバーヘッドマニア」

「貴女に笑顔を届けにいく。ボンバーヘッドマニア」

「貴女に笑顔をアフロヘアを ボンバーヘッドマニア」

「そして貴女を攫っていく ボンバーヘッドマニア」

鬱陶しくて仕方ないのに視界に入ってきた言葉が全部頭にこびりついて離れない。とうとう唯は家に向かって走り始めた。その瞬間、上から頭上を覆いつくすくらいのたくさんの紙が降ってきて、視界は一面白く染まった。紙が全て落下してから上を見たら、低空飛行していたセスナが上昇していくのが見えた。思わず周りを見渡したけれどやはり周りには誰もいない。唯もこの紙は自分宛のメッセージなのだと認めざるを得なくなった。足元に散らばる紙をそつと拾い上げたらそこには一言書かれていた。

「貴女の宝物はあなた自身なんです ボンバーヘッドマニア」

不思議と怖くなかった。

気持ち悪いとも思わなかった。

ないと思つて諦めてたドラマを味わえただけで幸せだったから、何でこんな事が起きたのなんて考えないで、この非日常を大事な思い出にしよう。そうだ。記念に紙を一枚持つて帰るのは許してもらえるかな。唯は久しぶりに心から笑いながら家路についた。それにしてもボンバーヘッドマニアってどんな奴なんだろうか。ここまですでやったんだつたらこの後本当に攫いに来たら面白いのにな。いやいや、そうやって期待しすぎるのがあたしの悪い癖じゃない。期待しすぎてもドラマは起こらないでしょ。浮き足立ったりそれをなだめたりしながらアパートの階段を登つて部屋のドアを開けたら、奥にあったのはいつも通りの暗い静寂な部屋。思っていた以上にがっかりしている自分にビクビクしながら電気をつけたら、その瞬間に

ベランダの窓の方からパシュツという音が響いた。ベランダに急ぐとそこにはアフロの毛が刺さった矢文もどきが吸い付いていた。アフロの中にチラリと見えた白い紙を見ようと手を入れた途端にインターホンが鳴り響いた。高鳴る胸の鼓動を止められないまま玄関のドアを開いたら、そこにはいつもニユースで耳にしていた服装の少年が立っていた。少年は大人びた外見とは裏腹の子供のような瞳の持ち主で、大人っぽくて整っている外見をアフロで台無しにしている年齢不詳の子だった。何故か見覚えのあるその少年は一回コホンと咳払いして唯に言った。

「アナタを見た瞬間からボンバーヘッドが似合うと思ってたんです。一目惚れと言ってもいいです。僕と一緒に来ませんか？」

そうして頭に乗せられた予備のアフロを振りほどく手も振り落とす頭も唯は持ちあわせていなかった。迷いなく少年の誘いに乗ると少年は唯を軽々と背負ってベランダの方に走り、助走をつけてそのまま2Fからダイブした。風を切りながら、唯は後ろを振り向いて今までの日常にさよならを告げた。



（後書き）

拙い話ですが、読んでくださってありがとうございます。  
ご意見や感想をいただけると飛び上がって喜びます。

この話にはちょっとした後日談があるので、もし興味があればそちらもどうぞ。後日投稿予定です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5009f/>

---

ドラマチック・ホリデー

2010年10月21日22時05分発行